MfG_J_Logistics_and_production_in_Edo_period
長岡の江戸期の物流　（水上、海上、陸上～ 長岡船道、信濃川 ）

内川

中越全域

北前船

新潟蒲原往来、北前船の航路と主な港

回船問屋と北前船の船主は別

陸路
　新潟～曽根～粟生津～与板～長岡
　直江津～柏崎～上除～長岡
　高崎～六日町～堀の内～長岡

長岡の江戸期、商品作物の商業化
長岡の江戸期の商業活動 ～　継之助と山万
その後の山万一族

長岡の内川河渡

水運も、長岡の内川から、
新潟、会津、直江津・高田、
小出、六日町、十日町、
そして信濃に通じていた。

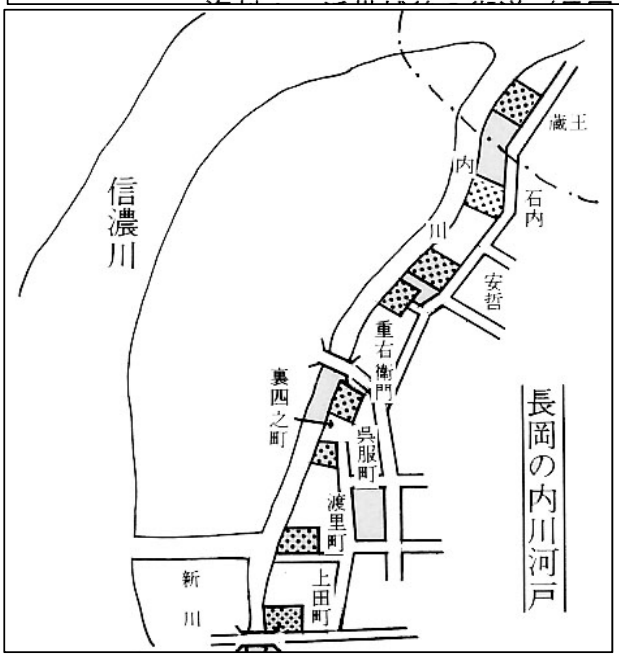
《 主 要 街 道 》

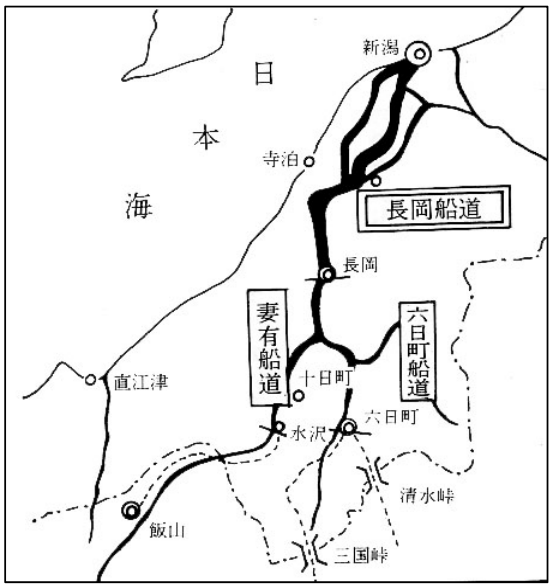
- 北国街道
- 北国街道浜通り
- 三国街道
- 三国街道山通り
- 会津街道
- 水運運行範囲

＜主要な河道＞

阿賀野川（会津）
信濃川（長岡船道、小千谷船道）
妻有船道）
魚野川（六日町船道）
関川

船道(ふなどう)とは
河岸を拠点とする
船持ち仲間





内川
http://koshikuwa.info/?p=3942

昔の長岡十二ヶ月の中　二月　呉服町蝋座稲荷初

北前船の航路と主な港
江差
松前
十三湊
能代
秋田
酒田
小木
岩船
新潟
輪島
寺泊・出雲崎
福浦
柏崎
伏木
今町（直江津）
三国
境
石見
小浜
下関
尾道
大阪
江戸

北前船

北前船の往来は周辺地域に大きな影響を与えた。1つは周辺農村の生産力の増加である。積荷のなかには冬の間の農閑期を利用した副業（プロト工業化）によるものもある。それらの需要が高まるにつれ、商品が優先的効率的に生産された。もう1つは造船産業の発達という可能性で、寄港地が船修理、船建造の作事を任されていたという。これらのことが周辺地域にも流通面を超えた影響を及ぼしたと思われる。また寄港地周辺では近畿の文化が伝わり、言葉・食文化等に影響がみられ、本州日本海側における文化の伝播役としての役割もあった。

『越乃雪』
和三盆糖は徳島の岡田製糖所のものです。こちらは230年前の創業当時から使わせていただいています。北前船の大海運業者銭屋五兵衛の資料のなかにも『越乃雪』の記述がみられます。阿波の国徳島から和三盆糖が日本海を北上して運ばれていました。
昭和初期までは流通が今のように発達しておらず、収穫が終わって精製された和三盆糖が年に数えられる回数で運ばれてきたために、蔵の中に1年分の和三盆糖が積まれ、先代が幼いころには蔵に近づいただけで甘い匂いが辺りにしていたそうです。

当店で『越乃雪』に使用している和三盆糖は「生」という呼称の和三盆糖です。一般の和菓子に使用されている和三盆糖は「かわき」と呼ばれており、打ち物やまぶしに多く使われており食感もさらさらしております。「生」は水分を多く含み、重たい感じがしますが、和三盆糖独特の風味は一段と強いように感じられます。「生」は岡田製糖所さんで当店用に調整していただいており、『越の雪』の命になるほど大切な素材です。

もう一つの大切な素材であります糯米の粉も『越の雪』のためだけに加工したものです。これは糯米を炊いてから天日干しにする行程を含んでおり、その他にも当店独自の方法を用いているため厳密に言えば寒晒し粉（現在は白玉粉とよばれる）とは呼べないものかも知れません。

寄港地

新潟県 長岡市

江戸時代の寺泊は、海上交通の要として栄え、本州から最短距で佐渡島に渡れる地としても知られました。北前船がもたらした富により、多くの人々が暮らし、海沿いには集落が作られました。寺泊はその名の示す通り、由緒ある多くの寺が建ち、古い歴史と美しい自然が調和する「日本海の鎌倉」とも呼ばれており、小路が入り組んだ独特の町並みが特徴です。

寺泊港の集落
北前船がもたらす富により人口集中が進んだ海岸沿の集落。家並みがぎっしりと建ち並び小路が入り込む独特の町並み。

寺泊おけさ
北前船により伝えられた熊本のハイヤ節が起源とされる芸能。

聖徳寺庭園
北前船で運ばれた大和の石と京都の庭師で築いた庭園

白山媛神社船絵馬
北前船船主たちが奉納した 52枚の船絵馬

新潟県 新潟市

2019年1月に開港150周年を迎える新潟港は、日本海を行く北前船などの回船や川舟が集まる町として栄えました。港に通じる小路が随所に延び、通りには広大な商家や船主の屋敷が建ち並びます。京など遠方が運んだ文化の影響も残り、民謡「佐渡おけさ」もその一つ。北前船はこの地にたくさんの富と繁栄をもたらしました。

日和山
北前船の水先案内（水戸教）のために日和を見た場所。現在も住吉神社や方角石が残されている。

旧齋藤家別邸（旧齋藤氏別邸庭園）
北前船で財をなした齋藤家が大正期に建てた別荘。特に庭園は、海浜部の砂丘を巧みに利用し、平地にありながら深山幽谷の趣を醸し出している。

燕喜館（旧齋藤家住宅）主屋
北前船で財をなした齋藤家が明治期に建てた邸宅。杉の四方柾、紫檀・黒檀が多く使われるなど、贅を凝らした造りとなっている。

旧小澤家住宅
北前船に関わる廻船業にも携わった商家・小澤家の店舗兼住宅。かつての新潟町における町家の典型例である。

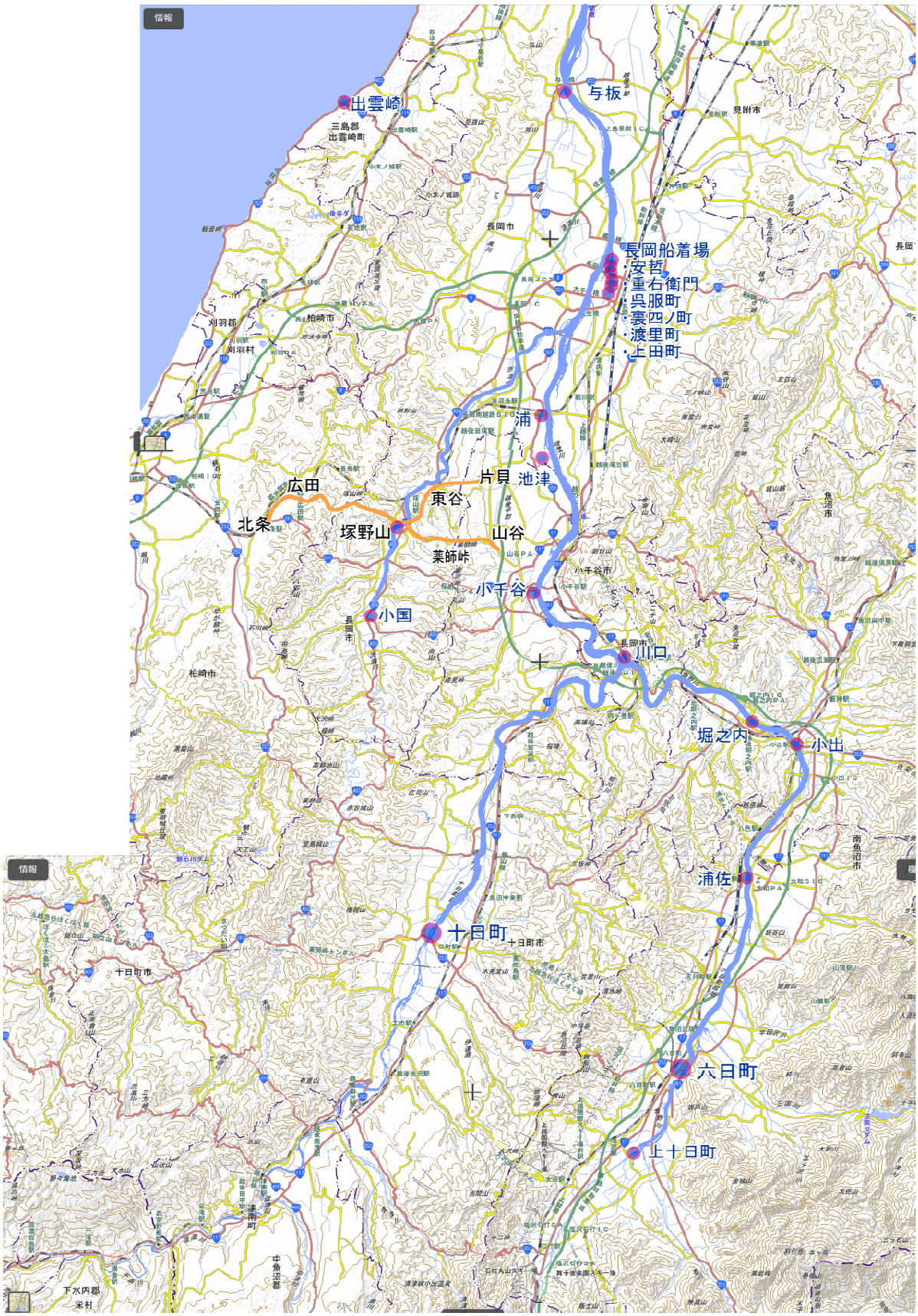
日本舞踊市山流（古町芸妓）
北前船の隆盛で全国屈指の花街となった新潟・古町を支える芸妓の芸の基礎。

湊稲荷神社願懸け高麗犬
かつての船つなぎ場近くにある湊稲荷神社の狛犬。なじみの北前船船頭たちが長く湊にとどまるよう、遊女たちが高麗犬をまわして願をかけたと伝えられる。

新潟まつり（湊祭・住吉祭）
北前船などの航海の安全を祈り、海の神である住吉神を祀るため始まったとされる祭。

新潟奉行川村修就関係資料
北前船寄港地として繁栄した湊町新潟の様子を初代奉行川村修就が記録させた資料。幕末の習俗や湊祭の様子などについて詳細な記録を残している。

大船絵馬
千石船四十隻を有するなど、北前船で隆盛を誇った市島次郎吉家が、新潟湊における御城米（幕領の年貢米）積み出しの様子を極彩色で描かせて、新潟町の鎮守、白山神社に奉納した絵馬。


出雲崎
与板
長岡船着場
安哲
重右衛門
呉服町
裏四ノ町
渡里町
上田町
浦
池津
片貝
東谷
広田
北条
塚野山
山谷
葉師峠
小千谷
小国
川口
堀之内
小出
浦佐
十日町
六日町
上十日町

新潟蒲原往来、北前船の航路と主な港

（1） 新潟蒲原往来

長岡藩飛地の巻、曽根の両組を経て新潟町に向かう。
新潟湊の北前船と長岡を結ぶ、重要な道路

三国街道　寺泊から、地蔵堂、与板を経て城下

柏崎街道　上除・宮本経由柏崎で北国街道に合流。

北国街道　近江国米原より琵琶湖東岸を南北につなぎ、
越前国今庄を経て直江津に通じる街道
北端は直江津（新潟県上越市）。
後に延伸されて渟足柵（新潟市）まで、更に鼠ヶ関まで。
（山形県鶴岡市）
北国街道（信越脇街道）
追分で中山道と分かれ、善光寺を経て直江津で北陸道に合流。
軽井沢町から上越市までの区間は現在の国道18号にほぼ相当する。

新潟蒲原往来の他の往来

栃尾往来　和田へ続く下通りが、本道。 小貫へ続く道、森立峠経由の道の三本。

山古志往来　村松村から、太田川に沿って山古志。

小千谷往来　信濃川の西岸個に沿って、小千谷。

（2） 北前船の航路と主な港

回船問屋と北前船の船主は別

http://www.izumozaki.net/tourism/hokkokukaido/
華やかな天領時代と石油掘削の歴史
こんな街でした

出雲崎は1616年(元和2)江戸幕府の財政を支える佐渡金銀荷揚げ港とし
越後で初めて七万石の代官所が置かれた幕府直轄の天領地となりました。
また出雲崎は日本で初めて石油の機会掘削に成功したことでも有名な近代
石油産業発祥の地でもあります。

江戸時代、徳川幕府の直轄地(天領)であった出雲崎は佐渡金銀の荷揚げや
北前船の寄港地で、北国街道の宿場町として栄えました。
廻船問屋街、旅館街が立ち並び、それに伴い遊廓も発展していきました。
様々な業種が集まり近隣の農家の二男、三男は「天秤棒1本持って出雲崎へ行け」と
いわれるほど働き口に不自由ないところでした。

天領出雲崎時代館
天領出雲崎時代館は、300年の時を越え、華やかにぎわった天領の時代にタイムトリップする
時間旅行館です。照明と音響によりさまざまに場面演出される御奉行船をはじめ、代官所、
北前船、江戸時代の家並みを再現。さらに、紙風船と凧づくりに挑戦できる体験コーナーもあり、
江戸時代の栄華と情緒とを存分に満喫できる展示体験スポットです。
また、オーシャンビューのレストラン「陣や」、物産販売店などもあります。

施設情報

[所在地] 出雲崎町大字尼瀬6-57(道の駅越後出雲崎天領の里内)
[問い合わせ先] TEL:0258-78-4000　FAX:0258-78-4770
[休館日] 毎月第1水曜日(5.8月は無休)、年末年始 [料金] 個人 一般500円
当時の人口はこの小高い丘と日本海に挟まれたわずかな平場に約2万人もいたと言われ、
人口密度は越後一でした。
よって、多くの人が居住できるように、また、当時は間口の広さに税金を掛けられていたこと
から二間や三間半といった間口が狭く奥行きの長い妻入り家屋が軒を連ね、約4kmにも
及ぶ妻入りの街並を形成しました。

「混同されがちですが、回船問屋と北前船の船主は別です。中には回船問屋でありながら
北前船を持って商売をしていた家もありますが、多くはありません。そもそも新潟には船主
自体が比較的少なかったようです」と伊東さん。新潟には米という主力商品があったため
、黙っていてもそれを買いに来る船がある。わざわざリスクの高い商売に手を出す必要が
なかった、というのがその理由だったようです。

商品作物の商業化

江戸時代中期以降、木綿や菜種といった作物が商品作物として盛んに
栽培が行われるようになる。江戸幕府は、当初は田畑勝手作禁止令を
出し商品作物の生産を禁止していたが、全国の市場経済化に押されて
後に結果として認めるようになる。

商品作物の代表的なものは四木三草（しぼくさんそう。
　　四木＝桑・漆・茶・楮。三草＝麻・藍・紅花）です。
このうち桑・楮・麻は全国的に栽培されていました。
それ以外の有名な産地は以下の通り。
漆（会津）、茶（山城・駿河）、藍（阿波）、紅花（出羽）
その他の商品作物
木綿（三河・尾張・伊勢・河内）、
青苧（あおそ＝カラムシの粗皮を水にさらして細かく裂いた繊維。
　布などの原料。越後・出羽）、
砂糖（薩摩・大隅・阿波）、
藺（い＝イグサ科の多年草。茎は花筵・畳表などの原料、髄は灯心にした。備中）、
たばこ（薩摩）、
茜（あかね＝茜染めの染料。遠江）、
紫草（染料、漢方薬。武蔵）、
油菜（近江・摂津・河内）、
蜜柑（紀伊）、
葡萄（甲斐）

天保の大飢饉
商品作物の商業化で農村に貧富の差が拡大したため、貧困の百姓が多く
餓死した。各地で餓死者を多数出し、米価急騰も引き起こしたため、各地
で百姓一揆や打ちこわしが頻発し、天保7年6月に幕府直轄領である甲斐
国一国規模の百姓一揆となった天保騒動や、天保8年2月に大坂で起こった
大塩平八郎の乱の原因にもなった。

長岡の江戸期の商業活動 ～ 継之助と山万

現在も、長岡の市街地中心部に広大な空き地がある。 山万の子孫の持ち物と言われている。
山万とは、山口権三郎の父・平三郎の弟の山口万吉が長岡城下に起こした店である。
上山藩飛び地という、長岡城下に比べてゆるい規制を生かし、差益を稼ぐこともあったという。
継之助も、大いに触発され、藩の財政改革に生かしたという。
以下は、稲川明雄著,「風と雲の武士」 恒文社(2010) p199-204の抜粋である。
江戸期の長岡商人の、長岡船道、北前船ネットワークと一体化した、商業活動の一端を
見ることができると思う。

慶応二年(一八六六)十一月、継之助は町奉行を兼務すると、ただちに有力商人(検断職)を
呼び寄せ、蟄居と舟道特権はく奪を言い渡した。
検断職は町役人の最高位であったが、一方では長岡船道を統治する組合を束ねていた。
長岡船道とは、信濃川舟運の特権を与えられた総称である。当初は、河口の新潟から信濃川の
善光寺平(長野市)までの河川交通権は、長岡船道組合に帰属していた。
船道からあがる利益は、船道株を持つ検断職をはじめとする一部の特権商人が持っていた。
その数は十八人を前後していたようで、栄華は城下にあって著惨を極めたという。特権商人の
ほとんどは質屋、問屋を経営していた。さらに、借家借地などの家産を多く所有していたのである。

本来、城下町の商人は武士に寄生しているものだが、長岡商人は信濃川の舟運を利用して商圏
をのばしていた。上りは信濃国の善光寺平や魚沼の上田(坂戸)まで、下りは新潟湊まで行き、蝦
夷や京、大坂の物資を交易した。越後の物産を運び、不足な塩物などを仕入れてくるのである。
城下の金融も彼らが独占していたから、他の多くの商人が幕末のころになると、特権商人たち
からの借金に苦しんでいた。

家中の侍は、余程のことがないかぎり、城下町商人と付き合うことはなかった。ところが、継之助は
一部の城下町商人に人気があった。たとえば太刀川佐次兵衛や山口万吉などである。
はじめ、佐次兵衛は「成り上がり者に何がわかるか」と怒った。ところが、継之助に会ってみると、
「船道株がかえって商業振興に役立っていないこと」を知らされた。
もう一人、継之助を信奉する者がいた。上山藩領小国郷横沢村出身の山口万吉である。大庄
屋格の山口家の分流で、いわば長岡城下商人にすすんで参入してきた農村出身の商人である。
上山藩領の村々の庄屋層を代表する大庄屋及び大庄屋格の豪農は、村役人として責租米など
を換金して本国上山に送金する必要から、金銭感覚に秀れていた。
小国郷を貫流する渋海川は、信濃川へ注いだが、その近くに長岡城下があった。城下には河戸
があり、物資を新潟湊まで河舟で運び、新潟商人に売り渡すことができた。従って、その中間の
長岡城下町に小国郷出身の商人が進出したのである。万吉の才覚は、城下に橋頭壁を築くこと
にあった。 万吉の店は何んでも商った。古着屋を開き、小間物もとり扱ったが、古着の売買は
表向きのことであり、小国郷の物産の移出に一役買ったことはいうまでもない。商いは次第に
間口が広がっていった。開国間もない横浜に行き、輸入品を仕入れてきた。

その後の山万一族

二代目萬吉ですが、東京の九段に邸宅が残っています。
昭和2年（1927年）に完成し、時代の荒波を生き抜いた、スパニッシュ様式の邸宅で、宅耐震構造の先達・内藤多仲が設計。現代の耐震基準も上回るそうです。　https://www.homes.co.jp/cont/press/reform/reform_00842/

2019年、日経新聞の日曜版と思いますが紹介され、更に2020年8月に、
BSの「百年名家」で紹介されました。